

カ」の夢を見ますので、七月二十三日舞鶴引揚記念館の参観にも行き、できれば埋葬地への墓参りにも参加したいと念願しています。

シベリア抑留記

福島県 熊田重行

出生から入隊

大正十四年三月四日、福島県田村郡守山町大字大供本地五十五番地、熊田家に生まれ、守山尋常高等小学校高等科を昭和十四年三月卒業し、家事農業の手伝いを二年ほど行い、昭和十六年一月から日本国有鉄道郡山工場に就職していたが、繰り上げ徴兵により昭和二十年二月東京世田谷七二部隊に入隊、直ちに渡満し、間島延吉満州二六三二部隊（塚本善太郎大佐）に入隊、輜重兵として、ソ連軍に対する特攻、対戦車攻撃の初年兵教育、訓練並びに中国人を使用し南方に弾薬の輸送などの任務につく。

ソ連軍の侵攻（八月十日）

大渡川宿舎から延吉に撤退。弾薬分散作業に従事、八月十四日大雨で作業中止。それぞれ遺言を書かされる。

終戦

正午に集合、停戦の報せを聞く。終戦により五万人くらいの兵隊が延吉に集結し、ソ連兵の指揮下に入り、八月末までコウリヤン、アカザ、アワなどを食べ、赤痢など患者がたくさん出て、食糧、衛生状態が極端に悪くなった。

シベリア抑留地への旅

延吉からソ連兵監視の下、八日間野宿しながらソ連領クラスキノに入り、十月十四日まで幕舎生活をする。十月中旬、貨車にてホールに行き、コルホーズに着く。

抑留地の生活

十月中旬から十一月中旬まで、雪の中、芋掘り作業で、凍土から掘り出すのは大変であった。その後、豆ひき作業など集会所に宿泊しての作業は、飢えと寒さで体の衰弱が激しく、シラミの発生で悩まされた。十一月末から道路工事作業に従事、十二月下旬ビキンに

移動。楽しみにしていた正月も、砂とゴミ混じりの粉とトマトの漬物と鰯二匹塩漬けの配給で、悪戦苦闘の末、やっと粥をつくって食べた。

二十一年は正月から発電所の地下道掘^{くさく}整作業に従事、三月から煉瓦工場のかま焚き（二交代）、ノルマ達成ができないのと、夏の暑さで身の細る思いをしながら秋まで作業継続する。秋から伐採作業に従事、飢えと寒さ、それに苛酷な重労働で死亡者も多く出て、ピキン川の中州に埋めた。何人かの指を切断、焼いて骨にして日本に持ち帰るわけであったが、ソ連兵に取り上げられ残念であった。二十二年前半、また煉瓦工場並びに製材工場で働く。二十二年六月ごろホールに移動、製材工場並びに材料運搬に従事、その後ビヤゼムスキーに移動、採石工場と製材所に従事、ノルマ達成できないで食糧が制限され、病人が続出した。二十三年九月までこの作業に従事し、十月から約一カ月コルホーズにて芋掘り手伝い。

抑留者の統制管理

作業は総てソ連軍人歩哨監視であった。

厳冬越冬は満足な衣類もなく大変な苦勞をした。入浴週一回、休暇週一日、月一回衣類の消毒など実施したが、単調な生活の中で、いかにして無事故郷の土を踏むことができるか？よく夢にまで見ることが多かった。その中で、体力の消耗を極力避けるように留意する。収容所も二、三十人単位で何回も変わり、最後まで初年兵扱いで過ごしたため、人一倍苦勞が多く、友人も少なかった。

帰還

昭和二十三年十一月、コルホーズから帰ると間もなくハバロフスクに集合命令が出て、十一月半ばナホトカに集結、十一月二十日出発、船中特に混乱もなく二十三日懐かしの舞鶴港に入港、久しぶりで日本酒で乾杯した。

帰国後の生活

帰国後一カ月くらい休養の後、元の職場に幸いにも復帰でき、勤続年数も軍隊生活が加算され、健康で停年退職できた。シベリアの労苦を思い出して、人生の極限に近い生活が戦後復興の職場での心の支えとなった。